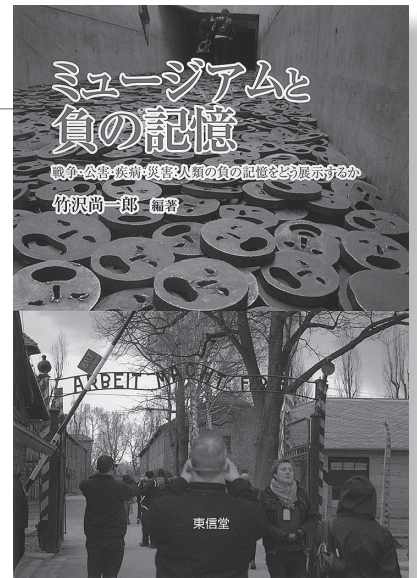


ミュージアムと負の記憶

—戦争・公害・疾病・災害：人類の負の記憶をどう展示するか

竹沢尚一郎編著

東信堂 / 2015年 / 本体 2,800円+税



本書は、国立民族学博物館機関研究「マテリアリティの人間学」領域「モノの崇拜：所有・収集・表象研究の新展開」プロジェクト（2009～2013年度）の研究成果の一部である。

このプロジェクトは当初3つの目的をもっていた。①モノが氾濫する一方で、絵画の高騰やお宝ブームなどのモノの崇拜が生じているのはなぜか。②大量破壊の時代である現代に、モノを介する人間の記憶はどう変化したか。③ピアスや形成外科などの身体加工技術の発展は身体モノ化を進めているのか。これらの問題を博物館の役割と関係づけながら考えていくことが最初めざされたものであった。

ところが、このプロジェクトが始まってすぐに東日本大震災が発生し、生命と身体のかげがえなさが強調された。その結果、③が後景化される一方で、②に力点が置かれていった。戦争や災害、疫病、公害などの悲惨な出来事は、どのようなプロセスを経て記憶として定着していくのか。個々人の記憶と集団の記憶＝歴史とのあいだにはいかなる齟齬があるのか。ミュージアムが多様でときに相反する記憶を表出可能であるためには何が必要か。それらの問いが生じたのである。

それらの問いを考えるにあたって、導きの糸となったのがキャメロン・ダンカンの「フォーラムとしてのミュージアム」の観念であった。世界中で変革が生じた1968年の精神を色濃く反映した論文のなかで、ダンカンはミュージアム概念に変革が必要だと説く。ミュージアムは、制度化された記憶や意識を再生産するだけのテンプレートではなく、既成の知を問い直し、新たな問いと思索を投げかける場としてのフォーラムになるべきだと説いたのである（「序章」）。

こうした主張は、第1部第1章の安田常雄の論文と正確に呼応している。国立歴史民俗博物館の現代展示をめぐる論文のなかで、安田は「現代展示は問題展示である」と断言する。その上で彼は、同館の展示が国家の史観をなぞるのではなく、普通の日本人が戦争と希望と困難に満ちた近現代をどのように生きてきたかを表象することにつとめたというのである。

アネット・ヴィーヴィオルカの第2章と濱田武士の第4章は、第二次世界大戦中に多くの死者を生んだアウシュヴィッツと広島原爆資料館をめぐる論考である。それらは、戦争の記憶が一枚岩的なものではなく対立を含むこと、そしてその記憶が戦後さまざまなアクターによって多様に意味づけられてきたことをあとづけている。一方、ハンス＝ウルリッヒ・ターマーによる第3章は、ドイツ・ドレスデン市の軍事史博物館の新展示を論じながら、武器に焦点をあてるのでは

なく、人間の営為としての軍事と戦争の表象をめざした展示であることを明確にしている。

つづく第2部は、疾病に対する社会的対応を論じた2つの論文からなる。平井京之介の第5章は、水俣病をめぐる市立と私設の2つのミュージアムの展示の差異に言及しながら、展示および展示の対象となる出来事の意味を社会に対して開いていくことの重要性を指摘する。一方、田村朋久の第6章は、差別に抗しながら社会的承認を求めてきたハンセン病患者・元患者の長期にわたる取り組みを、岡山県長島にあるハンセン病施設の世界遺産化に向けた取り組みとからめながら論じている。

第3部は、東日本大震災の被災地の1つである岩手県大槌町の役場の保存運動と関係づけながら、町民の多くが反対しているこの施設を保存することの意義と、そこに東日本大震災に関する展示の施設を併設することの可能性を論じた竹沢の論文を収めている。

以上の論考に対し、最後に収められた7篇の研究ノート（ボルボト派による大虐殺の跡であるカンボジアのキリング・フィールド、ワシントンのベトナム戦争戦没者記念碑、南京虐殺記念館、元慰安婦が共同生活をおくるナムムの家、韓国ソウルの西大門刑務所跡、ワシントンのホロコースト博物館、神戸市の人と防災未来センターをめぐるもの）は、これらの施設を訪れることで生じた問いを中心に論じている。

出来事に対する個々人の経験が多様であるように、その記憶もまた多様でありうる。一方、公共の施設としてのミュージアムは、画一的で権威的なメッセージを発する誘惑にさらされている。とはいえ、既存の知をなぞらえるだけのミュージアムでは、来館者の関心を集めることはできないだろう。彼らの関心を引きつけるためには、つねに新たな問いを発し、困惑に満ちた感動を惹き起こすことをめざすべきではないだろうか。

文 竹沢尚一郎

国立民族学博物館民族文化研究部教授。専門はアフリカ史・アフリカ考古学。著書に、『西アフリカの王国を掘る』（臨川書店 2014年）、『被災後を生きる：吉里吉里・大槌・金石奮闘記』（中央公論新社 2013年）などがある。後者をもとに、2017年1月から国立民族学博物館で東日本大震災の展示を計画している。